

機関紹介：オルデنبルク市民大学

機関名：Volkshochschule Oldenburg (オルデنبルク市民大学)

<https://www.vhs-ol.de>

市民大学は、ドイツ語の「フォルクスホッホシューレ」の訳で、短縮してVHS（ファウハーエス）と呼ばれる。一般成人を対象とする教育機関で、ドイツ国内の各市町村に存在している。運営母体は多くが eingetragener Verein（「登録組合」「公益法人」）または地方自治体であり、経済基盤も受講料のほか地方および中央行政からの財源等で成っている。ベルリンやハンブルクなどの大都市には市内に複数のVHSがあるが、オルデنبルクには一つだけである。各VHSは独立した組織であるが、州の連合組織、またその上の国の連合組織があり、各VHSはその傘下に属する組織ということになっている。

VHSには、「人はだれも教育を受ける権利をもち、教育は生涯にわたって続けられるものである」という基本理念がある。ドイツでVHSに多くの人々が集まり利用しているということは、社会に一般成人教育が根付いているということであろう。また、それを支える理念が人々の意識に浸透しているということになるだろう。

オルデنبルクのVHSには1920年頃からの前史もあるが、正式に eingetragener Verein として設立されたのは、第二次世界大戦が終わって一年後の1946年の6月である。2016年には、設立70周年を記念してイベントが開催された。

オルデنبルクのVHSでは、他のVHSと同様、多様なコースを提供している。2018年の春／夏コースのカタログ（年2学期制のため年2回発行）を見ると、まず今期の特別テーマとして「ふるさと一留まる・探す・見つける」を挙げ、郷土を知るためのコースが並んでいる。続いて、語学、第二言語としてのドイツ語（移住者や難民を対象）、社会人のための資格取得講習、芸術・文化、健康・栄養・フィットネス、人と社会・歴史、識字・学校教育の補完など、分野別に約250種のコースが載っている。語学コースの中では、英語やフランス語などのメジャー外国語の他に、ドイツ手話、低地ドイツ語（この地域の言語バリエーション）、学習者の少ない諸言語（日本語はこの中に含まれる）など、計23のコースが開講されている。

（上記部分を書くにあたっては、Deutscher Volkshochschul-Verband のホームページ、およびVHS-Oldenburgの冊子「70 Jahre VHS Oldenburg」とコース・カタログ「Frühjahr/Sommer 2018」を参照しました。）

日本語コース：

オルデنبルク市民大学で初めて日本語コースが出来たのは、2003年の2月であった。以来15年間、基礎コースI（初心者コース）は毎学期、開講されている。各期18名が基礎コースIに登録したとして計算すると、18名×30学期で、約540名が日本語学習を開始したということになる。オルデنبルク市の人口は約16万人であるから、市民の0,3パーセント以上が、受講料を払って教科書を買って日本語の勉強を始めた経験を持つというわけである。

2018年3月現在は、基礎コースI, II, III、継続コースIIの4レベルで授業が行われている。オル

デンプルク市民大学の日本語コースの1学期は、16週間。講師は2名。使用教科書は「まるごと一日本のことばと文化」の【りかい編】【かつどう編】である。授業料は、1学期間で106ユーロ（1ユーロの教材費を含む）である。

日本語のようなマイナーな外国語コースの悩みは、受講登録者の数が7名未満になると、コースが開講できなくなることである。基礎コースⅠが開講された後、たいてい4、5学期目で登録者は7名を割ってしまう。そこで、近接の上下のコースを合体させたり、足りない人数分の受講料を残りの受講者で割って払ったりして、なんとかコースを存続させようとする。しかし、それでもだめな場合は仕方なくコース消滅となる。講師によっては、消滅したコースの残存学習者のために自宅で小グループの授業をする者もいる。

VHSの日本語学習者の特徴は、アニメ・漫画・コスプレ等をきっかけに日本語に興味を持った若い世代だけでなく、生け花や武道など日本の伝統文化を通して長年、日本に興味を持ち続けている中高年世代が存在することである。若い学習者が習得のスピードを強みとするなら、中高年の学習者は持続力と学習ストラテジーを強みとしている。

文責：沼崎 邦子
VHS-Oldenburg 日本語講師
2018.03.10